百々裏話（44）

おもて　あきら

〔音曲道歌雑考―その六―〕

・歌の漢数字は本稿掲載道歌の通し番号、算用数字は当該歌群中の歌順を示す。

(4)音韻・謡・鼓道歌

音阿弥百首系道歌について考察した「その四」(42)に紹介した、内閣文庫蔵『音曲百首』と鴻山文庫蔵『永禄三年暮松伝書』には、既に言及した如く、音阿弥百首系の暮松百首とは別種の道歌群が末尾に収められている。内閣文庫本は「五韻直拗二音之図歌」と題して一一四首、鴻山文庫本は「五韵直物二音図歌」と題して九九首の道歌を収め、歌数に差が激しいが、重複する歌は小異はあるが同じ歌と言えるから、同系統の道歌群と認めて差支えあるまい。この道歌群を、内容に即して「音韻・謡・鼓道歌」と仮称し、その全容を紹介しておきたい。両本ともにかなり乱れた本文を持ち、歌順にも少々変動があるが、歌順は内閣文庫本に従い、本文は両本を適宜取捨した上で（結果的には鴻山文庫本に従った所が多い）文字づかいを改めて掲出することにする。長大なので次回とに分けざるを得ないことを御諒承いただきたい。内容についての補足説明等も次回の予定である。＊印は内閣文庫本のみの歌。括弧の傍記は異文）

1、韵はひゞき平に上がり去り入は
　下の字によると思ふべきなり　（一五九）

2、軽かろし重おもくなる清すめる
　濁にごるなり上の字によれ　（一六〇）

3、アイウエヲ喉に通ずる事なれば
　この字は喉の扱ひと知れ　（一六一）

4、カキクケコ牙に響ける字にあれば
　牙音に通ふ皆心持て　（一六二）

5、サシスセソ歯に響くなり心得て
　歯音になるとかねて知るべし　（一六三）

6、タチツテト舌の上なりさりとては
　舌内の覚え物ごとにあれ　（一六四）

7、ナニヌネノ舌頭なれば何事も
　その心得を知るべかりけり　（一六五）

8、ハヒフヘホ唇なれどその中に
　横に通ずるごとくあるべし　（一六六）

9、マミムメモ是も唇なりといへど
　この字ははたと合ふぞ唇　（一六七）

10、ヤキユエヨ是も喉なり心得て
　遍唯あまねく通ふなるべし　（一六八）

11、＊ラリルレロひるがへす舌とよく知りて
　かろくまはさん其の事を知れ　（一六九）

12、ワヰウヱオ唇に満てる仮名ぞかし
　この字は惣へわたるべきなり　（一七〇）

13、謡をば雪霜へたる梅が枝の
　一輪さけるごとくなるべし　（一七一）

14、謡をば念珠のごとくに謡ふとや
　地はつぶ〳〵とまろく大小　（一七二）

15、謡ふ心鉄よき剣ねりぬきに
　包めるごとくたしなむぞよき　（一七三）

16、五音とは先づ祝言に幽玄の
　恋慕哀傷さては闌曲　（一七四）

17、皆人の謡の内の句がはりを
　長く引きては何の用ある　（一七五）

18、陸奥のいづくはあれどさしごゑの
　僧はたたくはさしごとと知れ　（一七六）

19、謡をば能のごとくに謡ひつつ
　能をば謡ふごとくなるべし　（一七七）

20、謡ふ人本の拍子を胸に持ち
　扇拍子はとにもかくにも　（一七八）

21、祝言の能はのどより上げてくり
　哀傷のくりへそよりぞくる　（一七九）

22、祝言は寒きかんとは何をいふ
　哀傷暑きかんと思はん　（一八〇）

23、消え失せぬ絶えぬや尽きぬぬの字こそ
　上がり下がりて有りや無しなる　（一八一）

24、松風や月の夜影に見る時は
　しらこゑなりと思ひ知るべし　（一八二）

25、翁かへりたつととつとで帰られば
ただたつとつとばかりなるべし（一八三）

26、打ち上げは早き遅きに定まらず
五つ拍子にちやうど合はせん（一八四）

27、金春に限る翁の舞なれば
余の大夫にはいらじとぞ思ふ（一八五）

28、*打ち立ても金春観世ふた流れ
この座のほかはあるまじきなり（一八六）

29、流れては妹背の中やつき弓の
古き寺井はかろく謡はむ（一八七）

30、百万をし似せん者はよきしてと
かねて思はん大夫なりけり（一八八）

31、佐保山は金春かたの大事なる
謡して方はやしもろとも（一八九）

32、老松はおとな能なり松風も
梅もろがしら大鼓打つべし（一九〇）

33、息つぎは拍子の果てに早く切り
声を静かに出だすべきなり（一九一）

34、*息つぎは当たる心ぞ比興なる
早く静かにかろくしたるく（一九二）

35、よき声や色ゆる節を頼むらん
謡といふは各別のこと（一九三）

36、鼓をば流るる水に物浮けて
流るるごとし早き遅きは（一九四）

37、世話せはをなんせずはともかう頭巾こそ
面目替ふるもとゐなりけり（一九五）

38、次第をも一声なども打ち出さん
時より能の比を知るべし（一九六）

39、さしごとやさしごゑまでも鼓をば
捨てまじきぞと思ふべきなり（一九七）

40、我が謡われと打つほど思はでは
上手の謡いかゞ打ちけん（一九八）

41、とにかくに横筋かひを打ちおきて
すぐなる道をたしなむぞよき（一九九）

42、すぐにゆく所は手をも打ちてよし
地のゆかぬをばまつすぐに打て（二〇〇）

43、置鼓ぬしなき程の待ち鼓
乗りて乗らずしすげなきぞよき（二〇一）

44、論議をば大夫のかたは真に打ち
地はたくさんに草に打つべし（二〇二）

45、静かなる舞は一さう二に乗りて
つまりつまりて五段急なり（二〇三）

46、同じ舞心のほどは静かにて
手はほけほけとかろく打てとよ（二〇四）

47、舞の序のはしりの内を思ふには
大夫の足の程に打つらん（二〇五）

48、三段の舞の心は中二段
捨つるばかりや習ひなるべき（二〇六）

49、おしなべて拍子の心思ふべし
中よき夫婦うしろ寝ぬると（二〇七）

50、序にも三つ破にも三つなり心得は
急にも序破の習ひあるべし（二〇八）

51、音に聞く九品の拍子などと云ふも
五段にくばる心とを知れ（二〇九）

52、*早き舞心は早く手もとをば
たださく〳〵と静かならまし（二一〇）

53、*珍らしき手はなかなかに無用なり
常にある手を珍らかに打て（二一一）

54、*五段舞序破急なれば中二段
むら有るべきも理りと知れ（二一二）

55、五段をば数九つに割りぬれば
はやしのむらはいかであるべき（二一三）

56、序の内や神楽の内は小鼓の
ままなりと聞け稽古肝要（二一四）

57、八つ頭小鼓よりぞ打ちかくる
その約束を大筒は知れ（二一五）

58、踏み留むる打ち上げ開口踏み留めぬ
打ち上げはただ名のるとぞ聞く（二一六）

59、一声の半打ち込みは打ち上げの
所を延べて謡ひ知るべし（二一七）

60、手といふは拍子と程とのみ入れて
乙甲かしら中しめと聞く（二一八）

61、乱拍子古今にそんぞなきと
聞くより習ひ稽古肝要（二一九）

62、揉み出しのたつとたつとぞ大事なる
小筒によりて揉み出されずや（二二〇）

（以下次回）

（42・1・4）